【時事通信社　５/８】

能登被災地へ初の修学旅行生　石川県「復興の状況学んで」

5/8(木) 17:59 配信 3

田植えを体験する修学旅行生＝８日、石川県能登町

東京からの修学旅行生の一行が8日、能登半島地震の被災地を訪れた。

石川県によると、地震後、能登半島6市町に修学旅行生が訪れるのは初めて。能登のなりわいの大きな柱だった観光業は地震で大きな打撃を受け、本格的な再開には至っていないが、県は「復興の状況をよく見て学んでほしい」と期待を寄せる。

被災地を訪れたのは、県と金沢市が誘致を進めてきた東京都目黒区立東山中学校3年の生徒約100人。

生徒らは能登空港で県職員らの出迎えを受けた後、民宿が集まる「春蘭の里」（同県能登町など）で県が推進する水素エネルギーの地産地消の取り組みについて説明を受け、「水素グリル」で調理されたちくわを試食。地元農家の話を聞き、田植えも体験した。

【共同通信社　５/８】

能登、地震後初の修学旅行生　「防災考えるきっかけに」

5/8(木) 18:08 配信

修学旅行で田植え作業をする東京都目黒区の中学生＝8日午後、石川県能登町

石川県能登地方に8日、修学旅行生が訪れた。県によると、能登への修学旅行の受け入れは地震後初めて。生徒らは輪島市の能登空港から、修復途中の道路や、土砂崩れで土がむき出しになった山肌を見ながら、大型バスで能登町へ移動。県の担当者は「被災地への訪問が、防災について考えるきっかけになれば」と話した。

修学旅行生は目黒区立東山中学校（東京都）の3年生約100人。能登町で田植え作業に参加し、その後、近くの小川で足を洗うなど普段できない体験を満喫した。田植えを指導した水上よしえさん（74）は「子どもたちが楽しそうにはしゃぐ姿を見て、元気が出た」と話していた。

【北國新聞】
（５/８　夕刊）

修学旅行生を出迎えるひゃくまんさん
＝8日午前10時10分、能登空港

震災後初の修学旅行生

東京から能登に107人到着

能登半島地震後、能登で初めてとなる修学旅行生が8日、能登空港に到着した。東京・目黒区立東山中の3年生107人で、石川県観光PRマスコットキャラクター「ひゃくまんさん」や法被姿の県、能登町の職員が出迎えた。

生徒はひゃくまんさんと記念撮影を楽しんだ後、宿泊先の能登町の農家民宿群「春蘭（しゅんらん）の里」に移動した。春蘭の里では、昔ながらの道具を使った田植えや水素エネルギーを活用したプログラムなどを体験する。

修学旅行は2泊3日の日程で、一行は9日に金沢市、10日に加賀市を訪れ、小松空港から帰路に就く。県観光戦略課によると、県には関東や関西から修学旅行に関する相談が寄せられており、担当者は「これを機に、再び多くの修学旅行生が能登に来てもらえたらうれしい」と期待した。

（５/９　朝刊）

奥能登 修学旅行戻る

震災後初 目黒の中学生107人訪問

田植えを体験する修学旅行生＝能登町鮭尾

奥能登に8日、修学旅行生が戻ってきた。地震後初となった一行は、東京・目黒区立東山中の3年生107人で、能登町の農家民宿群「春蘭の里」などを訪れ、水素エネルギーを活用したプログラムや田植えを体験。生徒は最先端の科学技術と伝統的な農業に触れ、能登の奥深い魅力を感じ取った。

水素エネ、農業に触れ

能登空港に到着した生徒らは、県観光PRマスコットキャラクター「ひゃくまんさん」らの出迎えを受け、握手や記念撮影を楽しんだ。春蘭の里にある交流宿泊所「こぶし」で行われた入村式では、事務局長の多田喜一郎さん(76)が「皆さんの笑顔と優しさが私たちの元気になる」とあいさつし、生徒と各宿の店主との交流に期待した。

春蘭の里には2023年に県が整備した「地産地消エネルギーシステム」があり、生徒は太陽光や小水力による発電で水素を作り、タンクにためて必要な時に使える仕組みを学んだ。

この後、能登町鮭尾の広さ約20アールの水田で農業体験が行われた。生徒は裸足で田んぼに入り、苗を手植え。ほぼ全ての生徒が初の田植えで、泥の感触に戸惑いながらも、笑顔で作業に取り組んだ。

みの、かさ姿になった毛呂彩夏さん(14)は「みのとかさは結構かわいいから気に入った。コメ作りの苦労や農家さんの努力に触れることができてよかった」と話した。

春蘭の里の民宿群には震災前、約50軒の宿があったが、震災で建物を取り壊すなどで10軒ほどが営業できない状況になっているという。それでも、6月にも大阪の高校生約220人が修学旅行で訪れる予定となっており、代表理事の多田真由美さん(25)は「能登へ足を運んでもらい、マイナスイメージをなくせるように頑張っていきたい」と意気込んだ。

【北陸中日新聞　5/9】

地震後初

奥能登に修学旅行生

東京の中学生 笑顔で田植え

奥能登地域に8日、能登半島地震後初めてとなる修学旅行生が訪れた。東京都目黒区東山中学校の3年生107人が、田植えなどを体験した。受け入れた一般社団法人「春蘭の里」（能登町宮地）代表理事の多田真由美さん(25)は「地震後も頑張る姿を見せ、能登の魅力を伝えていく」と思いを新たにしている。（猿渡健留）

「楽しい！」「最高！」。同町鮭尾の田んぼに生徒の元気な声が響いた。春蘭の里のプログラムは、奥能登4市町の農家民宿に泊まりながら、自然を生かしたさまざまな体験ができるのが売り。生徒は田植えの他に、水素エネルギーで動く自転車などを見学。夜は能登、穴水両町の約20軒の民宿に分散して泊まり、9～10日は金沢市などを訪れて帰路に就く。

同校の西田友幸校長は「地震前から能登へ来ることを検討していた。田植えなどで地元の人と触れ合い、元気に過ごすのが支援につながると思う」と話した。

田植えをする生徒の前で修学旅行の受け入れ再開を喜ぶ多田真由美さん＝能登町鮭尾で

受け入れた春蘭の里「頑張る姿見せる」

春蘭の里は、過疎化する地域を盛り上げようと多田さんの父喜一郎さん(76)が30年ほど前に始めた。地震の影響で約50軒あった民宿は40軒ほどに減り、修学旅行生の受け入れは2023年秋以来だった。

多田さん親子は地震直後から、小学校の廃校舎を活用した「宮地交流宿泊所こぶし」（能登町）を自主避難所として運営。他の住民と一緒に半年ほど生活した。遠方から来たボランティアも宿泊場所を求めて次々と押し寄せ、真由美さんは「悩む暇もなかった。これまで接したことがなかった人と仲良くなり、人生の良い経験になった」と前向きに捉える。

3月にフランスからのツアー客が来て、大型連休中は観光客3組を泊めた。6月と9月にも修学旅行生の受け入れが決まっており、子どもたちが地震について学ぶ機会をつくれないか考えている。真由美さんは「ここで思い出をつくってもらい、能登のことが忘れられないようにしていきたい」と意気込んでいる。

【朝日新聞　５／９】

地震後初めて能登へ修学旅行生　東京の中学、「ひゃくまんさん」歓迎

永井啓子　2025年5月9日 10時00分

田植えを体験する修学旅行の中学生＝石川県能登町

能登半島地震 後初めての修学旅行生が8日、能登地域を訪れた。東京都 目黒区立東山中学校の3年生約100人で、石川県 能登町の農家民宿群「春蘭（しゅんらん）の里」で、水素エネルギー の活用法を学んだり、田植え を体験したりした。

一行は午前10時前、能登空港 に到着。県観光PRマスコットキャラクター「ひゃくまんさん」や、法被を着た県職員らの出迎えを受けた。

県の実証事業で、太陽光発電 や 小水力発電 で作った電気を使って、さらに水素を作り出す設備がある春蘭の里では、水素で動くキックボートや ドローン の実演に見入った。地元農家の手ほどきで、田植えも体験した。この日は、被災地の能登町や穴水町の20軒の農家民宿に分かれて宿泊した。

参加した生徒の一人、田中望琴（みこと）さんは「（ 能登半島 地震は）テレビの中で大変だなあと思ったが、これから実際、見て感じて、もっと地震について考えていきたい」と話した。水素エネルギーのイベントについては、「水素がどう使われ、どんな工夫がされているか身近に感じることができた」と話した。

9日は金沢市の 兼六園 などを回り、10日に 小松市 の「ゆのくにの森」で 伝統工芸 を体験。小松空港 から帰京する予定だ。

県によると、地震前の2023年度は延べ6571人の修学旅行生が能登地域を訪れていた。

県は修学旅行誘致へ向け、被災した施設や町並み、変化した自然など、26カ所からなる震災 学習プログラム 集を作成。今年度、 語り部 の育成や、学校関係者、旅行事業者向けのモニターツアーに取り組む。

春蘭の里には、6月に大阪の高校、9月に東京の中学校の修学旅行の予約が入っているという。